

Title	栃木縣足利郡三重村今福 立岩古墳群の調査
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1952
Jtitle	史学 Vol.26, No.1/2 (1952. 12) ,p.118- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19521200-0118">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19521200-0118</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 栃木縣足利郡 立岩古墳群の調査 三重村今 福

清水 潤 三

### 一、序 説

慶應義塾大學文學部考古學研究室に於ては表記三重村在住川島守一氏の斡旋により、同村字立岩所在の古墳群を昭和二十四年三月一日より三日間に亘つて調査することが出来た。こゝにその概要を報告し、併せて川島氏の好意に感謝の意を表したい。

足利市の背後を略々東西に連亘する足尾山塊の一部は大小の谷によつて開析され、その結果南に傾斜する半島狀の丘陵突出部が並列するに至つてゐるが、これらの丘陵上、或は斜面には無数の古墳が見られる。試みに丘上に立てば、眼下には渡良瀬川の清流が颯々と伸び、關東平野を一望の中に収めて眼を遮るものなき絶好の眺望が得られ、墳墓の地として相應しい形勝の地であるが、かような夥しい古墳群の發達は單にそれ許りではなく、漸く山地を脱した渡瀬良川は今日もその片鱗を示すが如く、洪水の度に亂流を繰返して、周邊に肥沃な低地を形成し、農耕生活者にこよなき居住地帯を提供したのであつて、こゝに古くから聚落の發達を見

たことに基くものと見るべきである。大部分の古墳が丘陵によつて營まれたのも、また氾濫による流失を避けた結果と解すべきで往時の景觀を推すよすがともなるであらう。

更に附近の山丘は古生層の硅岩質の岩石より成り、覆土が淺く隨所にその露頭が見られ、石材はまことに豊富であり、古墳築成の風に拍車をかけたことであらう。事實この地方の古墳は少數の例外を見る外、殆んど全部が右の石材を用いて構築した横穴式石室を有している。

一方これらの古墳は古くから學界に注意されたのであつて、明治十九年坪井正五郎氏によつて行われた足利公園内の圓墳三基の發掘は我國に於ける古墳の學術的調査の嚆矢であつた許りでなく、出土品にも見るべきものがあつた。第三號墳出土の鈴杏葉の如きがそれである。次いで大正二年には高橋健自氏が西ノ宮、助戸十二天の兩古墳を調査され、前者から銅釧、環頭大刀柄頭など、後者からは鹿角製刀裝具、鈴杏葉、環鈴、鈴釧、鏡鑑などの優秀な遺品を出土した。昭和に入つては後藤守一、森貞成兩氏の調査した織姫神社境内の古墳が所謂丁字形石室を以て著名となり、同じく兩氏によつて山邊村八幡古墳群も調査された。この古墳群は戦後瀧口宏氏等によつても發掘が行われている。

その他學術的調査を経たものではないが、機神山に存する前方後圓墳の横穴式石室からは鈴釧、鏡鑑、杏葉などが出土し、前

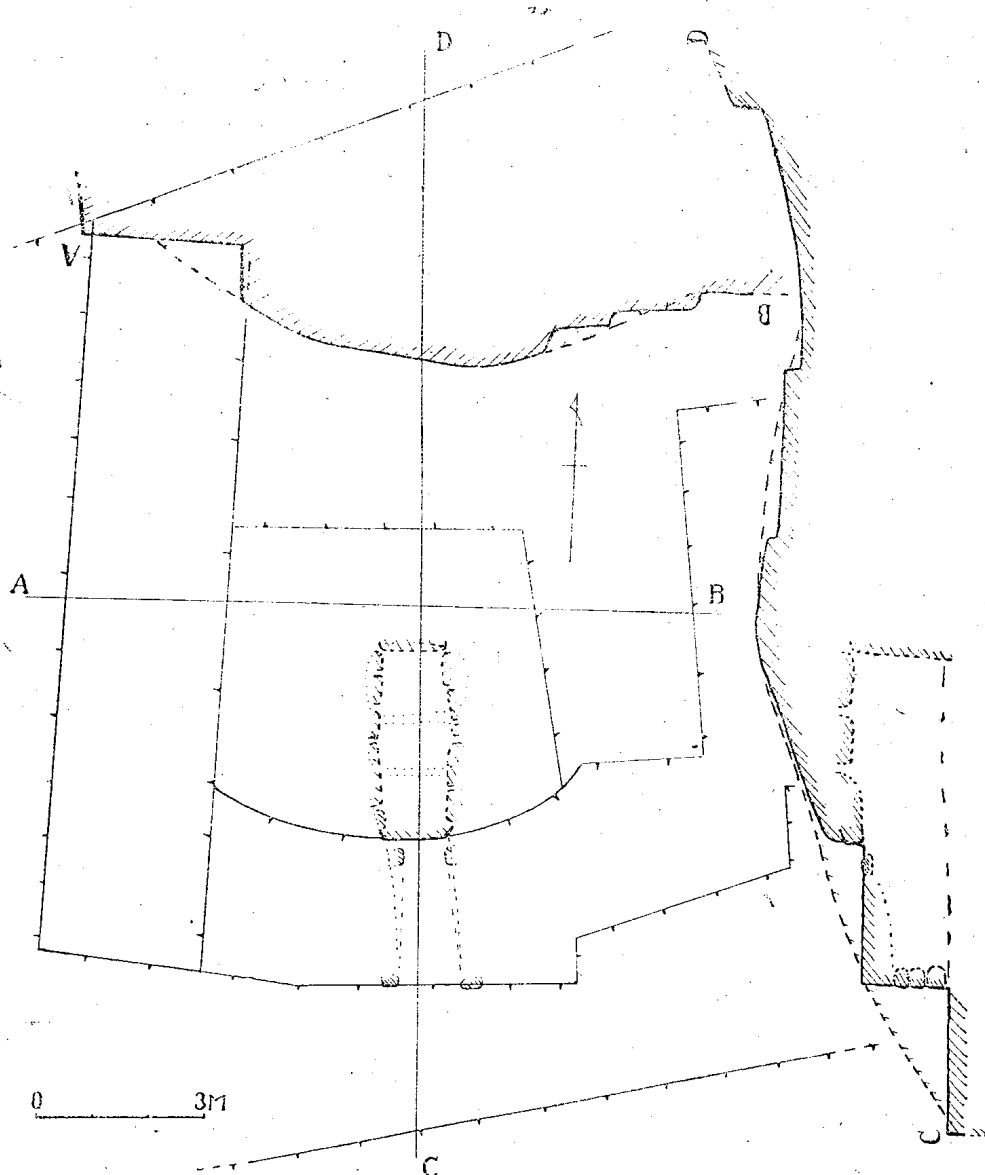
二者は川島氏の好意によつて本塾考古學研究室の藏に歸して居るし、足利公園丘麓の古墳からは銀象筥を施した鞍金具、銅鏡、衝角付兜などが出土して居り、佛像の出土も傳えられている。また埴輪類も甚だ多く、古墳後期の遺物に見るべきものが多いのを著しい特徴とする。即ち古墳の形式からすれば、所謂古式古墳や大形の前方後圓墳は殆んど見られず、横穴式の整美な石室を有し、封土の比較的少さい圓墳の群集して存する點が注意されるのである。機神山頂古墳の如き山上に營まれた前方後圓墳も同形式の横穴式石室を有し出土遺物も大差ないことが知られ、年代が特に遡るものとは思われず、他方山腹斜面に營まれたものは全て後者であると云つてよい。併し先に觸れたように小圓墳の出土品に見るべきものが多い點は興味深く、今回調査した立岩古墳群も亦この範疇に入るべきものである。たゞ必ずしも年代の異なる古墳が存在しないとは斷じ難く、川島氏の示教によれば山上の古墳で川原石積みの石室を有するものがある由であり、今日全く跡を止めないけれども今福の低地に牛塚外一基の前方後圓墳が存したらしく、これらは或は年代に若干の隔りがあるかとも疑われるが、こゝでは先を急ぎ、一言附記するに止めておく。

なお足利附近古墳の特徴は足尾山塊の東端下都賀郡富田村附近に於ても見られる。即ち筆者が去八月通信教育部學生大久保右次氏の好意によつて實査し得た同村下皆川（兩毛線大平下驛附近）

の古墳群も丘陵斜面に營まれた小圓墳で、同じく硅岩質の岩石を利用して横穴式石室を營み、その平面は狹長で天井の巾が狭い點など立岩第七三號墳と軌を一にして居り、出土品にも鈴杵葉や、金銅張り有文鏡板などがあつて同じ文化圏に屬することを知り得た。翻つて足利附近の古墳群は古くから注目されていただけに、明治以降密掘の害を蒙ることも甚だしく、災を免れた古墳は十に一も存しないという、恐るべき状態を呈している。幸い川島氏、最近物故された丸山瓦全氏の如き研究者によつて、保護され、或は散逸を免れた遺物が少くないことは感謝すべきであらう。

## 二、立岩古墳群

さて今回我々の調査した古墳は足利市周邊古墳群の西部に位置する一群で、三重村大字今福字立岩七八三番地にある。「足利郡古墳綜覽」によると、字立岩のみで二一基が記載されて居り、これを立岩古墳群と假稱することにするが、その最西端に當る三基、即ち同書登錄番號第七二、七三、七四號墳である。これらの古墳は背後の山地から南に突出した丘陵の先端斜面に位置し、直下に於て兩毛線の鐵路と足利―桐生街道が交叉している。立岩古墳群はこれから丘陵の東側へかけて密集し、道路との比高十二乃至十五米の邊に營まれていたのであるが、戰時中鐵道と縣道とを立體交叉に改良する工事に際し、土取工事によつて多くが破壊され、



第1圖 第73號墳實測圖

(110) 110

次いで終戦後の開墾によつて一層その度が甚だしくなつた。我々が調査した當時、既に原形を止め、既掘の痕跡なきものは殆んどなく、第七二、七三號の兩墳が一部開墾削平されながらも最も有望と思われたのであるが、その後も破壊の手が加わつているものと見え、本年五月訪れた際には兩墳ともに石室の残骸を曝すにすぎない状態にあつた。かくて我々は立岩古墳群の最後の姿を記録することになつたのである。

### 三、調査の概要

今次の調査は藤田亮策講師を主査とし、松本信廣教授、江坂輝彌副手に筆者を加えた四名が参加した。一行は三月一日現地に着、全般の踏査及び一部實測を行い、翌二日第七三號墳を發掘、三日は第七二號墳を調査したが共に早く發掘されて居り、第七四號墳の石室殘存部實測を行つて、同日夕刻調査を一應打ち切つたのである。以下所見の概要を簡単に記しておく。

1. 第七三號墳(第一圖参照)

丘陵の西端から二番目に位置するもので、終戦後の開墾により周囲を削られて著しく原形を損じているが、墳丘の存在は判然と望見された。實測圖から復原すると直徑約十五米の圓墳で、高さ三米五〇内外と覺しく、脚下の道路から石室床面までの比高は約十三米、葺石、湟を缺く。



第2圖 羨道入口の状態

石室は南に向けて築かれ、羨道入口が斜面に開くが、礎岩質岩石の偏平な小塊を積み上げ、時に川原石を混じて閉塞した状態が段畑を作つた際の切取面に露出して居り、興味深かつた。また羨道兩壁の外側に積まれた石塊も露れて居り、石室周囲の補強状況を明示している。(第二圖参照)

發掘開始後間もなく羨道部最奥より二枚目の蓋石が失われている

ことが知られ、容易に石室内に入ることが出来たが、この部分に劍斷片、埴輪靱破片が発見され、既掘の疑いが濃くなり、次いで石室内清掃の結果、何人かの手によつて早く攪亂されていることが明かとなつた。たゞ魔手は玄室の最奥部に限られたらしく、奥壁から八〇糎附近より前方には床の川原石敷が残存し、奥壁から一米五〇糎附近で、東壁に近く金銅環二、勾玉一、管玉一、白玉一、丸玉四、同じく中心線よりやや西側に金銅環二、刀子一が見出され、それ等に伴つてそれ〴〵人齒が若干発見されたので、玄室兩壁に並行して二體の埋葬が行われたことが知られ、一方玄室最奥部では攪亂された土中から鐵鏃數個に人骨の小片を得たから、此の部分にも死體の置かれたことが窺われ、最少限度三體の合葬墳であることが推定された。石室内の清掃は江坂君が擔當し、京都大學々生近藤義郎氏が援助を與えられた。

本古墳の石室は横穴式石室で長さ約五米三〇、巾一米二〇乃至三〇の狭長な平面を有し、羨道と玄室との區劃が判然とせず、わずかに奥壁から二米の附近で天井石が一段低くなり、これが兩者の境を示すように思われる。併し玄室の高さは一米六〇、羨道部で一米四〇であるから、その區別も明瞭なものではない。奥壁は巾一米七〇以上、高さ二米に及ぶと思われ一枚石を据え、側壁は塊石を以て四段に築き、空所は碎片、或は川原石を以て充填すると共に、第二段目からは持送り式に張り出して天井の巾は七五

櫃内外にせばまつているから、一層狭長な感じがする。床面は玄室の部分に川原石を敷き、羨道入口へ向けてやゝ下降傾斜しているらしいが十分明かでない。石室構築に用いられた石材は全て丘陵の基盤と同質の岩石であり、空所の充填用とか、敷石に小形の川原石が用いられているにすぎない。

なお本古墳の周辺にはハニワの破片が点在し、羨道部からは前記の通り、盗掘の際紛れ込んだと覺しき靱の破片が見出された。かく埴輪の存在は疑問の餘地がなかつたので是非ともその配列の状態を明かにしたいと考え、開墾當時實見した人々の談話によると一米程の間隔で周圍をめぐつていた痕跡が認められたらしいので、入念に發掘を試みたが、周縁部は既に破壊が著しく、圓筒基部まで除去されつくしたと見え、遂に得る處がなかつた。

## 2. 第七四號墳

丘陵斜面の西南端に位置し、第七三號墳より三米ほど低く營まれている。玄室最奥の部分が残存するのみで、奥壁の巨石が聳え、その前に天井石が側壁の崩壊に伴つて東方へずれ落ち、慘澹たる光景を呈している。天井石の下には約三〇糎四方の空所を隔て、川砂利の層がある。これが玄室の床面で、川砂利直上から人骨の小片を獲た。危険を慮つて發掘を止め、實測のみを行つたが、東側石室側壁を観察すると、床面と覺しき川砂利の層は下から二段目の側石に接している。これから推すと第七三號墳の如く石室内

部から觀察した場合、側壁が四段と見えたのも或は五段であつたかと疑われ、これ等の古墳も予想以上に慎重に築成されている事實を知ることが出来た。

## 3. 第七二號墳

第七三號墳の東に隣接するやゝ小形の圓墳である。三日早朝より發掘を開始したが、間もなく既に發掘されていることが明かとなり、次いで猛烈な西風の爲に作業不能に陥つた爲、ついに調査を斷念した。たゞ封土から埴輪馬の脚部一ヶが発見された。

## 四、出土遺物

### 第七三號墳出土品

1. 勾玉 一ヶ (第三圖3)  
碧玉製、長さ二・五糎、形も整い、よく研磨され美しい光澤を有する。

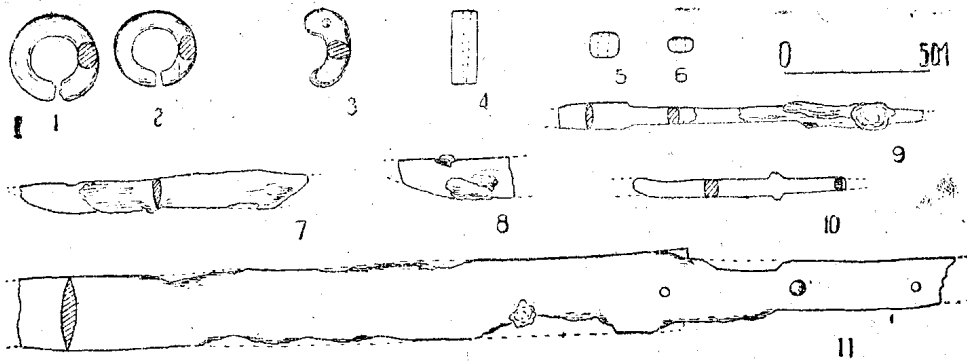
### 2. 管玉 一ヶ (第三圖4)

碧玉製、長さ二・五糎、徑〇・九糎、ずんぐりした短いもので、片扶りの孔は一方に偏在する。

### 3. 白玉 一ヶ (第三圖5)

ガラス製で風化著しく、褐色を呈する。徑一・〇五糎、高さ〇・八糎。

### 4. 丸玉 四ヶ (第三圖6)



第3圖 立岩古墳群出土遺物

ガラス製で風化した爲、灰色を呈する。徑九糎、高さ〇・五五糎、四ヶ共殆んど同質同大である。以上の玉類は石室の東壁に近く一團となつて存した。

5. 金銅環 四ヶ

太さ〇・七糎、徑三・一糎のもの二ヶ(第三圖1)と、太さ〇・六糎、徑二・八糎のもの二ヶ(第三圖2)の二組がある。四ヶとも青錆が厚く恐らく金銅環であつたと思われるが確言出来ない。特に大形の二ヶは質が脆くなる程腐植が激しい。各一組づゝ石室内の東西に分れて發見された。

6. 刀子二ヶ(第三圖7・8)

一は現存長九・八糎、身幅〇・九糎の小形のもので、肝心の莖の附近が缺損し、且つ腐

植して型式、拵えが明瞭を缺く。他は身幅一・四糎のやゝ大形のものであるが、先端部四糎餘を残すにすぎない。前者は石室西側の金銅環と共存し、後者は最奥部に存した。

7. 劍 一ヶ(第三圖11)

先端と莖末端を缺くが現存部で双長二三糎、莖九糎、双幅二・六糎、やゝ華著な造りである。莖が長く目釘三ヶを有し、その一ヶが錆の爲十分明らかでないが、關より内側にあるらしい點が注意される。双部に鑄は見られず、断面は薄い凸レンズ状を呈している。羨道部盜掘坑の直下より出土し、恐らく密掘者によつてこゝまで運ばれ、遺棄されたものと推定される。

8. 鐵鏃殘缺 四ヶ(第三圖9・10)

一ヶはやゝ完形を窺い得るが、他の三ヶは莖の小斷片にすぎぬ。前者は双部の $\frac{1}{2}$ を失い、莖端も少しく缺失しているが、現存長一二・五糎、鋒は普通に見る劍形であろう。石室最奥部に散在した。

9. 埴輪

殘片のみで羨道部から發見された靱以外には特記すべきものがない。

10. 人骨 齒牙 若干

一體は七歳前後の小兒であるらしい。なお發掘終了後川島氏は數多い集藏品の中からこの古墳群出土と

稱せられる左記の遺物をえらんで本塾考古學研究室に寄贈された。

1. 直 刀 三
2. 金銅環 一
3. 碧玉管玉 一
4. メノウ六角管玉 一
5. 銅 鏡 一
6. 鐵 皿(殘片) 一
7. 埴輪斷片 約三〇

これ等についても説明を加えるべきであるが、別に川島氏が寄贈された各種の遺物と合せて他日を期することとし、此處には目錄のみを載せて謝意を表するに止めたい。

また隣接の一古墳から発見された瑪瑙勾玉一、滑石製勾玉一、金銅環五、直刀一、刀子二、鐵鏃約一〇、須惠平瓶(口邊内部に黛印あり)、埴輪殘片(所謂消火器形の一部、馬の鈴)などが川島氏及び附近農家に傳えられていることを附記する。

なお最後に川島氏はもとより今次の調査に種々の便宜を與えられた栃木縣關係當局、田代黑瀧氏、地主森田氏の好意に對しても心からなる感謝を捧げつゝ筆を擱くこととする。

註(一) 川島守一氏の示教による。

(2)

足利附近の古墳に關しては多くの報告があるが、「栃木縣史蹟名勝天然記念物調査報告」第二輯によく纏められて居り、「下野史談」第二十九卷第一號には川島守一氏の「足利地方の古墳文化」がある。また同氏著「足利考古圖録」には遺物の寫眞が多數輯録されている。

(3)

「足利市織姫神社境内古墳發掘調査報告」後藤守一、内藤政光、森貞成。

(4)

「下野機神山古墳の發掘」考古學雜誌 第二六卷第七號 森貞成。(一九五二・九・一七)